

目次

開会式	1～2
記念講演Ⅰ	3～6
第一部「世界遺産英国バース市の温泉活用」		
第二部「“湯～園地”による別府市の地方創生」		
分科会Ⅰ	7～8
「温泉入浴によるアスリートのリハビリとパフォーマンスの向上」		
分科会Ⅱ	9～10
「温泉とアクティブシニア層の健康増進」		
分科会Ⅲ	11～12
「温泉の町別府における障がい者スポーツの現状と今後の展望」		
記念講演Ⅱ	13～14
「スポーツが担う新たなまちづくり」		
温泉会議	15～20
来場者アンケート	21～24
特別講演Ⅰ	25～26
「子どもと女性のスポーツアカデミア」		
特別講演Ⅱ	27～28
「六郷満山開山1300年を迎えて」		
新聞報道資料	29～

開会式

名 称：別府ONSENアカデミア 開会式

会 期：2016年11月25日（土） 13:00～13:25

会 場：別府国際コンベンションセンター ビーコンプラザ レセプションホール

主 催：別府ONSENアカデミア実行委員会

後 援：厚生労働省、経済産業省、環境省、スポーツ庁、観光庁、大分県、温泉所在都市協議会

協 賛：公益財団法人JKA

式次第

1. 主催者あいさつ
2. ご来賓紹介
3. ご来賓あいさつ
4. 閉式



会場前受付



オープニング映像



開 会



客 席

開会式



主催者あいさつ



ご来賓（壇上）



開会式前会場



来賓あいさつ

記念講演 I

第一部「世界遺産英国バース市の温泉活用」
第二部「“湯～園地”による別府市の地方創生」

1 講演

- (1) 演題：第一部「世界遺産英国バース市の温泉活用」
講師：バース市前市長 ポール・クロッスリー氏
講演概要

ローマ帝国の支配下において当時より温泉地として栄え、18世紀以後、富裕な貴族たちによって開発された美しい建築群と温泉保養地としての世界遺産に認定されており、イギリスではロンドンの次に人気のある観光地で、別府市の姿姉妹都市でもあるバース市より、前市長のポール・クロッスリー氏をお招きし御講演いただいた。

○バースは英国国内で唯一、高温の天然温泉が湧いている温泉地で、国内の他の温泉地では、冷泉や加温泉を使っている。バースの地表に降った雨は、地下2.5～4.5kmの石炭紀の石灰岩層に達し、そこで地熱により64～96℃まで温められ、その水が石炭紀の石灰岩層の割れ目から地表に湧き出たものがバースの温泉である。石灰岩層の上部にある不透水層のおかげで、温泉水が地表に湧き出すための自噴圧を保つことができ、5,000～10,000年に渡るこの過程を経て、温泉水が出来る。バースの温泉の源泉については、今でもよくわかっておらず、古くから城壁に囲まれた旧市街の3か所の源泉が使われている。

○紀元前8000年頃より温泉の周辺で人々が生活していたという証拠が見つかっており紀元前1世紀には、ケルトの神殿が温泉の周辺に建てられた。紀元1世紀にローマ人がバースまで勢力を伸ばし、その後4世紀かけてローマ人はバースを人々の信仰と健康、福利のための一大温泉保養地へと変えた。彼らは神殿と浴場を全ての源泉の周りに作った。この地で見つかった呪いの鉄版やコインから、当時ローマ帝国全土から人々がバースの浴場を訪れ、湯治や治療を受けたことがわかっている。ローマ帝国の崩壊に伴い神殿や浴場は廃墟と化してしまいました。その上バースは地震にも襲われ、地元の有名な魔術師マーリンの「健康に良いとされるバースの温泉は冷たくなり、死をもたらすであろう」といった予言が現実となった。

○西暦973年にイングランド初の統一王となったエドガー王の戴冠式がバース寺院で執り行われた。1174年にクロス・バスの隣に聖ジョーンズ病院が建てられました。温泉を利用した健康増進と療養がその主な目的でしたが、娯楽目的の温浴も多く行われていました。その後ヘンリー8世による修道院の解体により、クロス・バスの管理が地元の自治体へ移り、ヨーロッパ各地から王族などの特権階級が痛風、浮腫や不妊等の治療のためスバを訪れ始めるようになり、1610年には、スバに隣接して、貧しい人々のために温泉療養を目的とするペロット病院が建てられた。

○バースの街が再開発により今の姿となったのは、ジョージア王朝時代。湯治の効果がはっきりと表れた例があり、当時のビールやワインは甘みを出すために鉛を使っており、水道管も鉛製であったため、人々は頻繁に鉛中毒に悩まされていた。そこで体内に溜まった鉛を排出するのに温泉での足浴が役立ち、鉛中毒の人々を救うことが出来た。症状が改善した人々が、地元に戻ると再び鉛で甘味を加えたビールやワインを飲み、解毒のため繰り返し湯治に訪れたことは、バースへのリピーターを増やすことに繋がった。この時代から裸で温泉に入ることへの不安感といった理由などから、全身衣服を付けて温浴をする習慣が始まった。これは日本の温泉文化とまったく違うところだと思う。

○1878年には、バース市の測量士のチャールズ・デービス少佐がキングズ・バスの漏出の原因を調べている最中に、ローマ時代の遺跡を再発見し、この発見とそれに続く発掘調査によりローマ時代の浴場施設の解明が進み、それが近代のバースの姿に繋がっており、この発掘と調査は今でも続けられている。第一次世界大戦中には浴場施設と温泉が傷病兵の治療の一部として利用されました。1920年代初頭にはバース東部の開発の際に開いた穴により、温泉水がスバに届かなくなっているという問題が見つかったが、この穴は早急にふさがれ、温泉水は元通りスバに供給されるようになったが、これを機に地元自治体はエイボン法を定め、地元自治体がバー



ポール・クロッスリー氏講演

記念講演 I

- ス市内全ての開発事業に関する強力な規制・監督権限を持つ事となった。
- 第二次世界大戦後 1978 年までは、スイミング、健康と娯楽がバースの代表となった時代であり、温泉は医学的な治癒目的に使われたが、60 年代から 70 年代にかけて、スパはローマン・ランデブーというフェスティバルの会場ともなり、今でもバースに住む多くの参加者にとっては、ある種伝説となっている。1978 年には、検査によりフォーラネグリアという非常に危険な病原菌が温泉水に含まれていることが判明し、温泉の使用が全面的に禁止となった。
 - 温泉保養地としてのバースの新たな歴史は 1987 年のバース市街の世界遺産登録に始まった。これを機に、浴場施設を再建し、歴史的観光スポットや健康増進やレジャー目的の施設として再び利用できるようにしようという議論が始まり、その結果生まれたのが、2006 年にオープンしたサーム・バース・スパである。
 - 28 年間使用されなかった温泉を再び利用したサーム・バース・スパがオープンし、この日よりバース市と温泉が再びひとつに繋がった。サーム・バース・スパは、今では新たなバースの主要産業の中核を担う存在となっており、スパを目的とした新たな集客増加に繋がっただけでなく、天然温泉が楽しめるホテルとして投資の呼び水ともなっている。また、シティー・オブ・バース・カレッジと提携して、マッサージや治療施術を行う技術を持った人材を育成するコースを設け、地元のスパ産業で活躍できる人材の確保に努めている。
 - 温泉保養地は、現代人の求める新たな健康や幸福の欲求に応える存在となっていて、それ故に健康的なライフスタイルに関するあらゆる要求を満たすことが求められている。スパという言葉の語源は「salus per aqua ー水による健康」の略語であると言われている。屋上の温泉プールで寛ぐ事は至福の時間であると言えるだろう。しかし単なるリラクゼーションにとどまらず、体を鍛えるための様々なエクササイズやスポーツも体験できる場所となっている。また、スパやスポーツの後は、200 か所以上のレストランやバーで飲食を楽しむことができる。
 - バース市と別府市の姉妹都市関係は 1994 年に結ばれた。当時、バースのスパは使用できない状況であったが、どのようにして温泉を復活させるかに関する議論が始まったところであった。そこでバースの姉妹都市として、温泉文化の発信地である別府市が大変相応しい相手であると考えた。
 - ヨーロッパの素晴らしい温泉保養地は、訪れる人々に常に安らぎを与える場所であり、バース市は、スパ産業の再生成功や、その市街地が世界遺産登録され長年その登録を維持しているという経験や見識に基づき、ヨーロッパの著名な温泉保養地一群の世界遺産登録という壮大な計画の中心となって進めている。ヨーロッパの他の 10 か所の温泉保養地と共に「ヨーロッパを代表する温泉保養地」としての世界遺産登録を目指している。

(2) 演題：第二部「湯～園地」による別府市の地方創生 講師：湯～園地計画総合プロデューサー 清川 進也氏 講演概要

100 億円以上の広告効果を生み出した「湯～園地」動画の制作者であり、「湯～園地計画」の総合監修を務めた清川進也氏に温泉を活かした地方創生について御講演いただいた。

○湯～園地の動画公開はちょうど 1 年前の別府 ONSEN アカデミアで、ここではじめて動画を公開した。その後様々な取り組みを 8 ヶ月掛けて行っていった。まずは湯～園地がどういったものか紹介すると、「お殿さま」と「バッタ」を組み合わせると「トノサマバッタ」。赤と青を組み合わせると紫。「ペン」と「パイナップル」と「アップル」と「ペン」を組み合わせると「PPAP」。遊園地と温泉を組み合わせると湯～園地。このように組み合わせるとまったく新しいものを生み出したのが「湯～園地」である。

- 湯～園地にまつわる数字には「ボランティアスタッフ 1,200」、「ご支援いただいた金額 91,000,000」、「広告換算費 10,000,000,000」。音楽家として湯～園地は新しくチャレンジの取り組みだった。というのは湯～園地は地域振興の取り組みであり、地域を活性化する取り組みだった。
- 私の考える地域振興の定義とは、まちに潤いを与えるもの、これは「Art」だと思っている。地域振興におけるまちの問題を解決する、これはアートでもあるが 1 word (ワンワード) で表



清川進也氏講演

記念講演 I

- すと「Creative」。アートとクリエイティブ、これを一輪の花に例えると10人が一輪の花を見たとき10人の解釈があるのがアートで、クリエイティブは10人がひとつの答えを見出す。
- 湯～園地実現における様々なエピソードを皆さんにお伝えしたい。「湯～園地クリエイティブの数々」8つのワンワード・エピソードは、
- ①「乱暴な企画を産み出す」
 - ②「想像を超える大きな夢を描く」
 - ③「簡単にゴールをさせない」
 - ④「お金がないことを言い訳にさせない」
 - ⑤「地域資源を徹底的に活用する」
 - ⑥「地域をリスペクトする」
 - ⑦「すべての行動をPRに置換する」
 - ⑧「散らかしたアクションのおとしまえをつける」
- いろいろな市町村が動画を作っているが、動画作成がゴールになっている。この動画の先にはSNSでの発信、プロモーションして、それを受け取った人が実際に体験する、この段階を経て生まれたクリエイティブにおとしまえをつける。私はこれを成功体験の創造だと思っている。クリエイターと地域の人描いたゴールがひとつの成功体験で結びつく。これはクリエイティブ。
- 特に「地域資源を徹底的に活用する」ということについて、地域にあるものを活用しながら地域の方々と接する時間を増やす、しかもクリエイティブをもって、そうすることによって地域にクリエイティブの種を蒔く、そうすることでクリエイティブの流出を防ぐ。残念ながら今の別府市にはクリエイティブで問題を解決するという仕組みがあまりない。私が8ヶ月別府にいて感じたことは「地産地消のクリエイティブファームが必要」。地域の人にしか分からないクリエイティブがあると思う。
- 地域の人たちと8ヶ月間掛けて作ってきた湯～園地、その中で感じた私なりの湯～園地、ワンワードでまとめると、温泉とは「Communication」だと思った、お湯とのコミュニケーションでもあるし、人とのコミュニケーションでもあるし、地球とのコミュニケーションでもあるし、自分自身とのコミュニケーションでもある。コミュニケーションツールだと思う。そのコミュニケーションツールを使って、の地域を盛り上げるクリエイティブ、このクリエイティブで問題を解決してきた、これが湯～園地だと思う。当初からここまでのイメージはあったが、実は8ヶ月の経験を経て、最後の湯～園地が実現するときに私が当初想像もしていなかったゴールにたどり着いた。それが、温泉エンターテイメントというものを造り上げた、ということ。これはどこのまちでもできるというものではなかったと思う。温泉観光都市として育った別府の方のマインド、意識の中にあるおもてなし、というこの意識が生み出した温泉のエンターテイメントだったと思う。地域の人たちは何か特段これを考えてやったわけではない。思い切って楽しむことによって来る人も楽しんでもらえるだろうというシンプルなマインドだったと思う。
- 今日から始まった2日間のONSENアカデミアでは温泉の利活用、これを皆さんで話し合う機会が多くあると思うが、私は温泉はエンターテイメントとして活用できるのではないかと考えている。

2 インタビュー

インタビュアー：東海大学海洋学部教授 齊藤 雅樹氏

回答者：ポール・クロッスリー氏

マーガレット・クロッスリー氏

清川 進也氏

インタビュー概要

齊藤教授より温泉とまちづくりなどをテーマにポール・クロッスリー夫妻と清川進也氏にインタビューを実施し、イギリスと日本におけるそれぞれの取組について聞いた。

Q. それぞれの講演をどう思ったか？

A. (ポール氏) 清川さんのプレゼンの楽しむというところなどスパやリゾートを別の形で捉えているのが面白かった。クリエイティビティで地域をまとめていったところが素晴らしい。

A. (清川氏) 1970年代のフェスティバルというところに共通点を感じた。温泉の菌の問題を解決してまちが発展していった過程に共感するところが多かった。

Q. バースでは健康がキーワードだが、マーガレットさんは医療に関わる仕事をされていると聞いている。バースではどのように温泉が使われているのか？健康増進か医療か？

A. (マーガレット氏) バースは両方の意味があるとおもう。とくに関節炎を専門にする施設がある。

記念講演 I

1978年に菌が出てからは温泉ではなくお湯で治療を続けたという経緯がある。その後各スパで幸せな生活や健康的な生活を提供することを目的としている。ひとつ例をあげると、バースまで2時間かかるところからリウマチの人が来るが、治療だけでなく、レジャーや社交のためにもバースに来ている。

Q. どういった年齢層の人を重点的に狙っているのか？

A. (ポール氏) 日本とバースの違いとして気付いたが、日本では何歳でもお風呂に入れるがバースは16歳にならないと入れない。温泉治療という面を見ても年齢層は高めである。

A. (清川氏) 全年齢層としたいが、経験から話すと私は福岡県飯塚市出身だが、東京で暮らすようになって地元の良さに気付いた。そう考えると特に若い世代にアプローチしたのが湯〜園地だったのかもしれない。説教くさくさではなくエンターテイメントを通じて伝えたのが良かったと思う。地元の小学校中学校大学を出て地元で就職する人がもっと多くて良いのかなと思う。

Q. バースの温泉に関する情報発信について聞かせて欲しい

A. (ポール氏) バースの場合幸いにも名前は世界で知られているが、スパのおかげで更に口コミで広がった。朝10時には長い列ができています。バース市の人口は1万8千人だが、レストランは200軒以上、フェスティバルは毎日のように開催されていて、大きなスポーツイベントも多く集まっている。

Q. 温泉への思いを一言で

A. (マーガレット氏) エンジョイメント
(ポール氏) リラクゼーション
(清川氏) エンターテイメント



パネルディスカッション



会場全景

分科会 I

「温泉入浴によるアスリートのリカバリーとパフォーマンスの向上」

1 基調講演

演題：アクアコンディショニングを用いたアスリートの医科学サポート

講師：国際武道大学体育学部教授 山本 利春氏

講演概要

- 水には、浮力・水圧・粘性抵抗などの作用があり、荷重制限、衝撃緩和、リラクゼーションなどの効果がある。
- タラソセラピー（海洋療法）は、プロ野球選手、フェンシング五輪選手がシーズンオフのリカバリーで実践している。
- アクアコンディショニングは、怪我をしている選手がパフォーマンスを維持する上で、心理面を含めて効果がある。

2 事例発表

事例発表（1）

発表者：国立病院機構西別府病院スポーツ医学センター センター長 松田 貴雄氏

発表概要

松田氏がトップアスリート（競輪選手会、大分トリニータ、中西麻耶選手、成迫健児選手、川澄奈穂美、山崎まり選手、加藤優選手）合計24名を対象に行った検証結果を発表した。

- 温泉入浴は疲労回復に欠かせない睡眠に効果がある。
- 適度な水分を摂り、熱い温泉に入ることが大切である。
- 良く眠るためのウォーミングアップとして、ア（愛情）イ（飲水）ウ（運動）エ（栄養）オ（温泉）の5つが効果的である。

事例発表（2）

発表者：株式会社バスクリン製品開発部グループ長 石澤 太一氏

発表概要

石澤氏がグループ長を務めるバスクリンの研究とトップアスリートへの支援内容等について発表した。

- レスリング選手を、シャワー浴群と入浴群に分けて調査した結果、入浴群の方が「疲労回復感」や「気分の状態」が良好だった。
- ロンドンオリンピックをはじめ、各種国際競技会においてアスリートをサポートしている。
- 1月21日に別府市と包括連携協定を締結。人々の健康増進、地域社会の発展、アスリートの別府温泉の活用に取り組む。

3 パネルディスカッション

コーディネーター：国立病院機構西別府病院スポーツ医学センター副センター長 馬見塚尚孝氏

指導助言者：国際武道大学体育学部教授 山本 利春氏

パネリスト：国立病院機構西別府病院スポーツ医学センター センター長 松田 貴雄氏
株式会社バスクリン製品開発部グループ長 石澤 太一氏

パネルディスカッションの概要

- 試合前夜に眠れない時や時差ボケ等には温泉入浴が効果的である。練習直後はシャワーを浴び、食事の後、睡眠の1～1.5時間前に入浴するとよい。
- RWC2019、東京オリンピック・パラリンピック2020のキャンプ誘致を推進する上で温泉は大きな武器になる。
- 温泉入浴がリカバリーに効果があることが実証された。
- 今後はパフォーマンスの向上に関するエビデンスをさらに蓄積し、キャンプ誘致や市民の健康増進につなげていく。

分科会 I



パネルディスカッション



会場全景



会場壇上



会場入口



検証モニター参加者 陸上 中西麻耶選手



山本利春氏講演

分科会 II

「温泉とアクティブシニア層の健康増進」

1 講演 (1)

講師：東京都市大学人間科学部 教授 早坂 信哉氏

講演概要

- 宮城県の雪深い診療所で医者として勤務していた時、寝たきりの方で訪問入浴サービスを受けている人が血圧がいくつだったら入浴しても安全なのかということ調べたのが温泉研究のきっかけとなった。
- 健康に欠かせない温泉・入浴の5つの役割は“洗浄”“浮力”“自律神経調整”“水圧”“温熱”であり、温熱は血流が良くなり疲労回復や肌にも良い。水圧には締め付け効果があり血流が改善しむくみなどがとれる。浮力には体重を10分の1に軽減しストレス解消効果がある。自律神経調整効果には、現代のストレス社会での慢性的な交感神経の興奮状態を和らげる効果がある。38℃～40℃のぬるい湯に入ることにより交感神経を緩めることができる
- 「温泉地」としての効果には、湯に浸かることだけでなく「温泉地」に滞在することによって得られる効果がある。温泉医学では「総合的生体調整作用」として認識されている。
- 温泉の効果が医学的に分かってきており、平成26年には温泉の適応症が改定され泉質別の適応症が拡大されている。
- 熱海市と行った研究によって、自宅に温泉を引いている人の降圧剤内服者の割合が少なかったことから温泉入浴には降圧効果があるのではないかと結果が得られた。また、週に1回以上温泉に入浴している人は悪玉コレステロールの平均値が低く、血中脂質に良好な傾向が見られるなど、影響を与えている可能性があった。
- 入浴が体調不良を起こすこともあるので注意すべきこともある。体調不良を起こしやすいのが上の血圧が160mmHg以上のとき、下の血圧が100mmHg以上のとき、体温が37.5℃以上のときなので、これらのときは入浴を避けるか、ぬる湯で短時間の入浴に留めるほうが良い。また、冬場はヒートショックに気をつける必要がある。入浴事故が多発する時期であり、脳卒中や心筋梗塞を起こしやすい。脱衣所を暖め、リビングとの温度差を5℃以内にする。浴室もシャワーを掛け流して湯気を立てたり、浴槽のふたを開けてお湯を張るなどして暖める。お湯の温度はぬるめの40℃～41℃までにする。

早坂信哉氏講演



前田豊樹氏講演



2 講演 (2)

講師：九州大学病院別府病院 准教授 前田 豊樹氏

講演概要

- 今回の別府ONSENアカデミアにおいて実施した「アクティブシニア層向け健康増進モニターツアー」において20名の参加者による4泊5日のモニターツアーを実施し、ツアー開始前と終了後に健康チェックを行い、どういった効果があったかを検証した。ストレスに関するアンケート調査とストレスホルモンと呼ばれるコルチゾール、ストレスによって出るといわれる唾液アミラーゼ、血液中のCRPについて検査を行った。わずか4泊5日のツアーであったが、アンケートによる調査では確実にストレスが下がっており、客観的な所見でもストレスに対する防御反応、攻撃反応が下がっており、血圧も下がっていた。

分科会 II

- 日本における温泉医学の祖であるベルツ博士の言葉に「温泉療養の効果は、温泉入浴の効果と周囲環境からの効果を分けて考えるべきではない」というものがあるが、今回のモニターツアーについても温泉入浴の効果だけではなく、温泉旅行の総和として効果が良く表れていた。
- 温泉の疾病予防効果について、別府市民から無作為に選んだ 20,000 人へのアンケート調査結果より、温泉入浴者は、男性は心筋梗塞や狭心症といった心臓病、不整脈、高血圧、高脂血症、うつびょう、慢性肝炎、アレルギーが少なく、女性は高血圧、腎臓病、うつ病が少なかった。
- 温泉の治療効果について、繊維筋痛症というリウマチに似た原因不明の病の患者 7 名に鉱泥浴による治療を行ったところ、痛みが 4 分の 1 程度に軽減。温泉には温熱効果により血圧低下、鎮痛効果、抗うつ効果、栄養改善、貧血改善、抗炎症、免疫増強の効果が見られる。ただし温泉も薬と同じでうまく使えば医用効果、間違っていると副作用があるので注意しなければならない。



モニターツアー（メディカルチェック）



モニターツアー（湯中運動）



モニターツアー（砂湯入浴）

3 パネルディスカッション

コーディネーター：東海大学海洋学部教授 齊藤 雅樹氏

パネリスト：東京都市大学人間科学部教授 早坂 信哉氏

九州大学病院別府病院准教授 前田 豊樹氏

パネルディスカッションの概要

- 早坂教授への熱海市以外での研究の予定についての質問に対し、2018年に別府市で開催される世界温泉地サミットにおいてまた大分県や別府市と連携が取れると良い。温泉研究に関する国立大学の分院が軒並み閉鎖されており、前田先生の級数大学別府病院は温泉研究の最後の砦であるので、別府や大分は今後の研究にとって重要な土地となるとのこと。
- 前田准教授より、温泉入浴は水を相手にしていることもあり良い部分と悪い部分がある。入浴関連死は日本で極めて多く、入浴時は水を飲むことが重要だが、入った後に飲むだけでなく、はいるまえにも飲むのが良い。入浴温度は40℃を守るべきだと思う。42℃を超えると血圧、心臓病、脳卒中に悪い効果が出る。入浴時間は10分を一区切りに、長く入りたいときでも10分で一旦上がり水を飲んで休憩するなどし、再度入浴するほうが良い。
- 温泉に関する医学的なエビデンスの取り方が難しく、今後かなり課題となってくると思われる点について、正規の医学、正規の科学として認められにくいのが、地道に研究結果を積み上げていくことや、個々の研究をまとめ上げたり、日本全国で環境省主導により集めていくなどの手法が提案された。



モニターツアー（地獄蒸し料理）



パネルディスカッション



会場客席

分科会Ⅲ

「温泉の町別府における障がい者スポーツの現状と今後の展望」

講演 1

演題：障害者スポーツを推進してきた太陽の家の取組

講師：社会福祉法人太陽の家 理事長 中村 太郎氏

講演概要

- 太陽の家の創設者、中村裕は1960年に英国のストークマンデビル病院のグットマン卿の元へ留学。グットマン卿は医師、看護師だけでなく、科学的なチーム医療を実施するとともに、スポーツをリハビリテーションに取り入れ、障がい者の残存機能を回復・強化し、全身の耐久力をつけさせた。
- 中村氏が尽力して1964年に開催された東京パラリンピックの翌年、「保護より機会を！」「世に身心障害者はあっても仕事に障害はあり得ない」を理念に障がい者の働く場として「太陽の家」は設立された。
- 太陽の家は、現在大分県別府市、日出町、杵築市、大分市、愛知県蒲郡市、京都府京都市に事業本部があり、共同出資会社と協力企業も含めると約1,900人の障がい者と健常者が在籍している。
- 大分国際車いすマラソン大会は1981年の国際障害者年を記念してスタートしたイベント。当初は、障がい者が車椅子を使用して長時間にわたって運動を続けることへの体力的な問題や二次障害などの発生の危惧から第1回と第2回大会はハーフマラソンのみが実施された。この2回の大会で、産業医科大学の緒方甫教授（本学会の初代理事長）らが、選手たちの医学的生理学的な研究を行ったことで、その安全性が確認され、第3回大会からフルマラソンが実施されることになった。1997年の第17回大会からは、国際パラリンピック委員会の公認大会となり、現在に至っている。
- 太陽の家の就労訓練部門では、1980年代より職能的に重度の障がい者の受け入れを積極的に行ってきた。さらに、ADL全介助の障がい者も受け入れる生活介護施設を80年代の終わりに設立した。2000年に入ると、日本は人口減少高齢化社会を迎え、核家族化が進み、地域社会の崩壊が顕著になってきた。社会から取り残され「孤立」し「排除」される人々が急増してきた。そこで2007年より「ソーシャル・インクルージョンの実現」を理念に加え、精神障がい者や発達障がい者の就労支援、高齢者の自立支援、生活介護支援に取り組んでいる。

講演 2

演題：HAL®フィットを活用した障害者の身体ケアとパフォーマンスの向上

講師：大分ロボケアセンター株式会社 取締役センター長 志岐 佳紀氏

理学療法士 吉武 優弥氏



中村太郎氏講演



志岐佳紀氏講演

分科会Ⅲ

講演概要

- 大分ロボケアセンター株式会社は重介護ゼロ社会を目指しており、コア事業は医療である。
- ロボットスーツ HAL[®]は下肢タイプや腰タイプなどあるが、仕組みは同一で体に貼った電極パッドが脳からの信号をキャッチしモーターが稼動して動きを補助する。脳からの信号が弱く筋肉がうまく動かせない人も、その弱い信号をキャッチし動かすことを繰り返すことで脳から神経、筋肉への伝達がうまくいくようになり、自立して動かせるようになる。
- 障がい者アスリートのパフォーマンス向上の検証にあたり、今回モニターとしてご参加いただいたのは3名の男性で、マラソン、テニス、バスケットと競技は違うがいずれも車椅子のパラアスリートである。HAL[®]の腰タイプ等を使用し、通常動かせなかった部分の動作補助を行うことによって筋力アップ及び可動域の拡大に関する調査研究を目的として実施した。トレーニングは週に2～3回、計20回で1回あたりの時間は60分程度。効果の評価は20回のトレーニングのうちの最初と中間と最後に行った。
- 今回の HAL コア・トレーニングでは、体幹部をメインにトレーニングを実践し、各モニター参加者の背部、腹部の筋力増強、座位バランス能力の向上が得られた。また、モニター参加者の主観ではあるが、それぞれの競技に関しては、数値的なデータは存在しないが、疲労の軽減・回復、気持ちの部分でのリフレッシュもでき、メリハリのある生活が送れたと思われる。
- 東京パラリンピックに向けて車椅子テニスの全日本 Jr. チャンピオンも HAL[®]体幹トレーニングを行っている。



ロボットスーツ体験



会場客席



HAL[®]フィットモニター参加者

記念講演Ⅱ

「スポーツが担う新たなまちづくり」

講演

演題：「スポーツが担う新たなまちづくり」

講師：スポーツ庁長官 鈴木 大地氏

(講師略歴) 競泳選手として1984年ロサンゼルス、1988年ソウル五輪に出場。ソウル五輪では男子100メートル背泳ぎで、日本競泳界に16年ぶりの金メダルをもたらした。順天堂大学大学院を卒業後、米コロラド大学ボルダー校客員研究員、ハーバード大学のゲストコーチなどで留学を経験。2007年には順天堂大学で医学博士号を取得し、2013年同大学教授。同年には日本水泳連盟会長、日本オリンピック委員会理事に就任。2015年10月よりスポーツ庁長官。また、2016年10月にはアジア水泳連盟副会長、2017年7月には国際水泳連盟理事にそれぞれ選任された。

講演概要

2019年に大分県が競技会場の一つとなるラグビーワールドカップ、2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されるなか、両大会に参加する国やチームのキャンプを誘致し、地域を活性化させる取組が別府市をはじめ全国各地で進められている。スポーツには人を動かす「チカラ」がある。新たなまちづくりの原動力となるスポーツのチカラについて鈴木長官より御講演いただいた。

- 2年前にスポーツ庁ができ、2020年東京オリンピック・パラリンピックでたくさんメダルが取れるよう競技力の向上も行っているが、国民の健康増進について厚生労働省とともに一緒に力をいれてやっているところである。
- 2017年の4月にスポーツ基本計画を発表し、みなさんにスポーツを実践していただくよう取り組んでいるが、スポーツの語源は「デポルターレ」といい、もともとの意味は「楽しみ」や「娯楽」というものだった。スポーツを通じて「人生が変わる」「社会を変える」「世界とつながる」「未来を創る」を実践していきたい。
- 成人の週1回以上のスポーツ実施率の目標を65%にしている。国民の3分の2は1週間に1回スポーツをやっている、そういう国にしていきたい。なぜこういう目標を立てているかは現在国民の医療費が右肩上がり増大しており、医療費を少しでも削減するために健康行政に取り組んでいる。医療費を削減するには病気を治すことより病気にさせない事の方が効果が大きいのではないかと考えている。
- ビジネスパーソンにどうやったらスポーツに取り組んでもらえるかという中で、通勤時間や休憩時間にスポーツに取り組んでもらう、スポーツに無関心な人にはファッションや観光と一緒にスポーツに取り組んでもらうといったスタイルを提案している。「あさ活」として出勤前の時間や通勤時、「ゆう活」として定時退社後のスポーツへの参加の推進に取り組んでいる。そして歩くことをもっと楽しんでもらえるよう「FUN+WALK PROJECT」として歩きやすい服装での通勤や様々なイベントを企画している。
- スポーツを通じた地域の活性化として、スポーツを景観・環境・文化などの地域資源と掛け合わせ、戦略的に活用することで、地域・経済の活性化を図る。特にこれからの5年間は大分県でラグビーワールドカップの試合が開催されるように、日本全国で国際メガスポーツイベントが連続して開催されるため、これをきっかけにスポーツによる地域活性化を行っていただきたい。
- スポーツによる地域活性化のために、地域スポーツコミッションの拡大が重要であるが、2017年1月現在で56団体あるコミッションを2021年度末までに170団体に増加させたい。地域のコミッションを作っただけだとスポーツ庁としても支援しやすい。企業体などではなかなか支援は難しい。
- スポーツの価値を高めていきたい。戦後日本人を勇気付けたのはスポーツの力だった。東日本大震災の後もなでしこジャパンの活躍が日本人を勇気付けた。スポーツが目には見えないけど日本を元気にしているということはあると思う。

記念講演Ⅱ



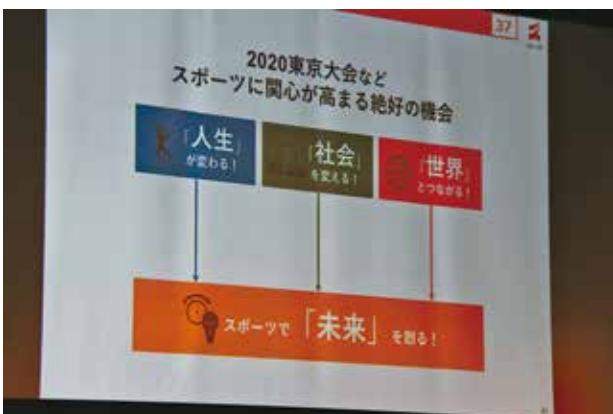
鈴木大地長官講演



会場全体



会場客席



講演スライド

温泉会議

- 1 名 称 温泉会議
- 2 日 時 平成 29 年 11 月 26 日（日）10:00-12:00
- 3 場 所 別府ビーコンプラザ 国際会議室
- 4 来場者数 200 名
- 5 テ ー マ 全国の温泉地首長による温泉会議「温泉地における課題と新たな取組」
- 6 内 容 全国の温泉地における諸課題と新たな取組みについて温泉地首長による討議を行います。各分科会で発表された項目に関する議論のほか、各温泉地における特徴的な取組み等の紹介、急増する外国人観光客に対応するための取組みや事業実施財源の確保、温泉や観光に対する目的税である入湯税についての考えのほか、前回の O N S E N アカデミアで議論された温泉入浴とタトゥーに関する問題について、別府市の事例を取り上げて様々な議論を交わしました。
- 7 講演者 <コメンテーター>
 - ・山本 麻衣（やまもと まい）／環境省自然環境整備課温泉地保護利用推進室長



山本麻衣氏

<パネリスト>

- ・片山健也（かたやま けんや）／北海道ニセコ町長
- ・徳永哲雄（とくなが てつお）／北海道弟子屈町長
- ・勝俣浩行（かつまた ひろゆき）／神奈川県箱根町副町長
- ・橋本達也（はしもと たつや）／福井県あわら市長
- ・齊藤 栄（さいとう さかえ）／静岡県熱海市長
- ・大西倉雄（おおにし くらお）／山口県長門市長
- ・佐藤義興（さとう よしおき）／熊本県阿蘇市長
- ・佐藤樹一郎（さとう きいちろう）／大分県大分市長

<コーディネーター>

- ・長野恭紘（ながの やすひろ）／別府市長

温泉会議

- 8 会議次第 (1) コーディネーター挨拶
(2) 温泉所在都市協議会会長挨拶
(3) コメンテーター紹介
(4) パネリスト紹介
(5) 議題
①各分科会報告
②温泉観光推進予算
③外国人観光客に対する入浴環境
(6) まとめ

9 開催状況 (写真)



会場全体



コメンテーター・コーディネーター



パネリスト



パネリスト

温泉会議



パネリスト



パネリスト



パネリスト



閉会あいさつ

10 会議概要

(1) 各分科会報告

① 分科会 1 『温泉入浴によるアスリートのリハビリとパフォーマンスの向上』

分科会 2 『温泉とアクティブシニア層の健康増進』

分科会 3 『温泉の町別府における障がい者スポーツの現状と今後の展望』

各分科会報告者：別府市観光戦略部文化国際課長 杉原 勉

報告概要：各分科会（P〇〇～P〇〇）を参照

② 討議

各自治体首長の出席が多かった分科会 2 のテーマを中心に、次のような議論が交わされた。

- ・ 経済合理性、競争社会が求められる現代社会において、メンタル不調になる人が多い中、分科会では人間性回復のために温泉は効果があるという発表があり、こうした科学的見地を広めていく必要があるのではないか。
- ・ 神奈川県では、未病（健康と病気の間を連続的に変化する状態）に関する取り組みを進めている。とりわけ温泉は未病に効果があるとされており、箱根町では温泉関連施設が未病の拠点として温泉の効果効能の発信をしている。分科会を通じてその方向性は間違っておらず、温泉の活用の可能性が広がった思いがする。

温泉会議

- ・ 研究発表ではさまざまなエビデンスが示されており、アカデミアの開催は非常に意義深い。アカデミアで得られた知見はぜひ全国の温泉所在都市にぜひフィードバックしてもらいたい。
- ・ 現在、温泉地の活性化に関する有識者会合では、温泉の有効活用をテーマに地域活性化にも期待できる「新・湯治」を提唱しようとしている。環境省の新たな取り組みとして今後進められると思うが、アカデミアでの研究成果等も新・湯治の中につなげていければ。
- ・ 各温泉地で行われている事業の知見やデータの蓄積がある。それぞれの温泉地が持っているデータを共有することでさらに有効活用できるのではと思っており、「新・湯治」にも役立つのではないかと。
- ・ 環境省では、全国に数多く点在する温泉地において、年代、国籍を問わず、長期滞在がより効果的であるという「新・湯治推進プラン」をまとめているところで、今後、各温泉所在都市の皆さま方にもこの趣旨に賛同いただき、ご協力をお願いしたい。

(2) 温泉観光推進予算

① 温泉観光推進予算について

説明者：別府市観光戦略部観光課長 松川 幸路

説明概要：温泉観光振興に対する財源の一つである「入湯税」について、入湯税収入の推移、税収全体に対する割合、入湯税と観光費との関連などについて、自治体間の数値比較や特徴的な点を説明した。

② 討議

- ・ 二セコ町では、爆弾低気圧、豪雪等の気象条件によって宿泊客の大量キャンセルが発生するなど、入湯税収入の変動が大きく、安定的な財源といえない面がある。(二セコ町)
- ・ 箱根町は、全国で一番入湯税収入が多い町であるが、町内人口 1.2 万人に対し、ごみ焼却能力は 5 万人規模、下水処理施設は 2 施設に加え、1 施設整備を進めているなど、経費面では人口以上の受入設備が必要。また、観光客に安心して来ていただくためには道路などのインフラ整備も人口以上の整備が必要。観光費以外の用途に使われているのはそうした理由からであり、入湯税だけでは賄いきれない面もある。(箱根町)
- ・ 大分市の観光費の伸び率が高い点は、昨年の熊本・大分地震の影響によるところが大きく。震災を経て、九州の観光地はチェーンになっており、連鎖的にダメージを受けることを認識したため地域復興も含めて観光PRには力を入れている点が表れているのでは。(大分市)
- ・ 入湯税は、観光振興のためにいろいろな企画をして使わなければならないと考えており、温泉だけでなく草原も資源、何より人の魅力を押し出していく施策に入湯税を投入していきたい。新たな施策がうまくいくことにより入湯税収入のアップにつなげていこうとしているところ。(阿蘇市)
- ・ 今、観光に対してしっかりとした予算付けをしていく必要がある。そこに住む人たちが生き生きとして、きれいな町で、しっかりとおもてなしをしていく。そういった再構築をしているところ。観光は種をまき、育てて、回収するというサイクルづくりが非常に大変。一地域だけでなく、広域的な連携も含めた取り組みも重要。(弟子屈町)
- ・ 入湯税は市の貴重な財源で、熱海には独自財源として別荘等所有税がある。地方自治体は、高齢化、財政難、地域経済の衰退、人口減少が進む中で、今後、住民税が増えることはない。どんなに頑張っても税収は下がる見込みしか作れない。そういうことを考えると、基礎自治体が生き残るには税収の確保が課題。安定的な財源確保という点で、観光地であれば宿泊税といったことも視野に検討していくことも必要で、京都市が既に取り組みを進めているが参考にしたい。視点として重要なのは、市民の幸せにつながるかどうか。それは交通渋滞の解消であったり、

温泉会議

バリアフリーの推進であったりといったものは、観光が入口でも住民福祉の向上にもつながっている。市民が幸せでないとおもてなしの笑顔が作れないと思う。(熱海市)

- ・長門湯本温泉では150年続いたホテルが廃業。これを何とかしないとということで、建物を解体した上で、その跡地を有効活用していく策を検討した結果、星野リゾートの「界」ブランドを誘致することができた。これをきっかけに星野リゾートに温泉街のマスタープラン作成を依頼し、事業を進めている。外湯も公設公営でやっていたものを民設民営の方向でプロポーザルを進めており、温泉地トップ10入りを目指している。(長門市)
- ・観光については、観光庁がありますが、政府をあげて観光振興に取り組んでいる。国立公園の満喫プロジェクトも従来は抑制的な利用だったのが稼げる利用でないと地域にも受け入れてもらえないということで、今回温泉地保護利用推進室ができたのもその流れと思っている。やはり予算と収入という役所の中にとどまらない健康や市民の幸せにつながる波及効果が出るとよいのではないかと感じた。話題が入湯税の観光施策充当が中心であったが、温泉観光地ではその根本である温泉資源の保護という視点で入湯税を活用していただけるとありがたい。(環境省)

(3) 外国人観光客に対する入浴環境

① 外国人観光客に対する入浴環境について

説明者：別府市観光戦略部観光課長 松川 幸路

説明概要：別府市内の宿泊施設、温泉施設等151施設を対象に行った外国人観光客に対する入浴環境のアンケート調査結果を特徴的な点を中心に説明した。また、インバウンド受け入れ策として、外湯施設における入浴マナーやタトゥー入浴可否等を多言語表記した温泉マップを別府市モデルとして紹介した。

② 討議

- ・別府市モデルのような新たな取り組みは重要。全国のラグビーワールドカップの開催都市での受け入れ先で対応が異なることは好ましくないので、統一したルールをできるだけ早く進めることが必要ではないか。(大分市)
- ・10年前からインバウンドが増えており、入浴マナーの議論が出てきた。かつて日本人がヨーロッパなどに海外旅行へ行き始めたころは、日本人お断りの店があったが現在はそういったところもなくなっていることから感じるのは、訪日外国人に正しい情報を提供して、認識してもらうことが重要。ニセコ町では国際観光担当として外国人職員を正規採用しており、こうした地道な取り組みを重ねていくことが、国際観光地としての質を高めることができるのでは。(ニセコ町)
- ・長門市では、農家民泊と漁家民泊といった体験民泊をやっている。教育的な民泊ということで希望は多いが受け入れる態勢づくりが課題。インバウンドでは、ラグビーワールドカップの公認キャンプ地にも立候補している。トンガが事前キャンプに来てくれることになっているが、トンガではタトゥーは一つの文化となっており、地域がこれを受け入れるための認識が必要。また、ラグビーによるまちづくりを進めており、女子7人制のラグビーチームを地元企業が応援している。オリンピック選手を出す目的で俵山温泉の近くにグラウンドがあり、温泉を持っている強みを生かし、ラグビーを通じたまちづくりを進めている。(長門市)
- ・熱海市はインバウンドが少なく観光客の5%程度で、まだまだ伸びしろはあると思っている。大型クルーズ誘致が全国的に進められているが、熱海の場合は2万トン級しか接岸できないので、規模は小さくても地元をしっかり消費してくれる富裕層のヨットを停泊してもらい、長期滞在の中で宿泊、飲食店利用してくれるところがターゲットになるのではと国交省とブループリントを描いているところ。(熱海市)

温泉会議

- ・ マナーの多言語化については、別府市モデルが紹介され土台ができてきたのかなという印象。これから温泉の良さ、効能なども含め、日本に来たら温泉を楽しんでもらうということを観光庁などとも協力して進めていきたい。訪日外国人のアンケートでは、日本での滞在をどのように過ごしたいかの希望で温泉に入りたいという回答が上位に位置していることから、国としてもなにがしかの取り組みを進めていければ。(環境省)

(4) まとめ

- 全国の温泉地自治体の長の皆さま方は地域の経営者であり、その皆さま方から本日いただいたご意見は非常に貴重なもの。地域が輝かなければだめだという思いを多くの方がおっしゃっていたが、観光と地域住民とのバランスを取りながら地域経営を進めていくことが重要ということを再認識できた。
- 温泉は、観光振興、地域住民の健康のどちらにもエビデンスを示していくことで非常に価値ある資源となる。
- 本日示したエビデンスのほか、地域が有している知見を集約し、環境省の「新・湯治プラン」の中で温泉地が共有、あるいは地域間競争できるようになれば。
- インバウンドは、今後さらに伸びていく。温泉地にとってはチャンスであり、タトゥーの件などの課題は地域とのバランスをどのようにとっていくかが課題。
- 本日の議論、データの提供を温泉地の皆さま方で共有していくとともに、次年度以降のアカデミアにつなげていければ。アカデミアに来ていただいた自治体の長の皆さまが来てよかったと思えるような、普段なかなか話せないようなこともアカデミアの中でやっていくことができるような場としていきたい。

別府ONSENアカデミア温泉会議(平成29年11月26日) 来場者アンケートまとめ

来場者数 (主催者発表)	200 名
アンケート配布枚数	130 枚
アンケート回収枚数	55 枚
回収率	42.3%

Q1 どちらから来られましたか？

1 市内	24	43.6%
2 県内 (大分市、豊後高田市、由布市、日出町)	20	36.4%
3 県外 (北海道、埼玉県、静岡県、福岡県、佐賀県、長崎県、鹿児島県)	11	20.0%

Q2 本日の温泉会議の議題について

(1) 各分科会報告について

【主な内容】

- ・分科会には出席できなかったが、内容がまとまっていてよかった。健康との関連はエビデンスが重要だと再認識。
- ・これだけの「温泉知識人」が集ったシンポジウムは貴重。大変有意義。1泊2日の日程も参加しやすい。ただ、毎年これを開くのは大変。別府では2年に1回開き、他は他の温泉地で持ち回り開催すべき。
- ・温泉は健康によいだけでなく、例えばアトピーとかスポーツ後の心身のリカバリーにいいと詳細についてのアピールが必要と思った。
- ・温泉に従事している立場から出席させていただきました。改めて温泉療養の効果とがん(大腸がん)にも効果が実証されていることにびっくりしました。新湯治の考え方を取り入れていくことが大切だと実感しました。
- ・各分科会の事務局からの説明時間(内容)が薄かったので、分科会の内容がよく分からなかった。箱根の「未病」に対する温泉の取組みや新湯治(スポーツ等+入浴)の紹介に興味を持った。
- ・3つの分科会は大変良かったと思います。特に温泉が医療関係に良いということは昔から治療に使用されており、いろいろな場で温泉イメージを上げていただきたい。
- ・未参加。しかし3つのテーマのまとめにより、温泉の効果、機能、活かし方へのチャンス、地域づくりの可能性が分かった。温泉の奥深さは十分なもの、意義のある資源と思う。
- ・健康・体調改善、スポーツ後のリカバリーに温泉入浴が有効なことを再確認した。なお、他の観点からの評価も必要ではないかと感じた。
- ・温泉が健康・スポーツ医療と幅広く効果があるとより市民、アスリートに広まり、理解できるデータにより利用増加を目指してほしい。
また障がい者へのサポートにおいても、障がい者へやさしく、サポートできるまちづくりを推進していただきたい。
- ・温泉は気持ちいい、身体にいいということが科学的にエビデンスを示していただくことにより外への発信がしやすくなると感じた。
- ・温泉がもたらす効用、それがどんな人にも通じるものであることが分かった。日本の宝であるこの温泉をもっと活かしていくべきだと思った。

(2) 温泉観光推進予算について

【主な内容】

- ・要は宿泊税のことだったのか…と思ったが、財政状況からそれぞれの特徴が分かってよかった。
- ・興味深いデータで解析すると色々なことが分かる。入湯税や観光予算は別府は少なすぎる。上げるべき。

- ・なかなか普段見ることのできない複数市の比較データが興味深い。
- ・各市の観光費中、入湯税の占める割合、観光客1人の観光費に対する割合等、比較が分かりやすかった。
- ・入湯税収入があっても、他の費用が多く財政は厳しいことを理解できた。宿泊税を検討していることをなるほど感じました。今後議論し、他自治体も進めていくことになると思います。
- ・入湯税について各市町の考え方又用途が若干違うことが分かった。入湯税だけでなく宿泊税のことも論議され、財源確保に苦慮していることがよく分かった。
- ・入湯税については各地で違うのではない。しかし温泉については環境を良くしないとダメ。必要なことは「きれいな温泉」作りに頑張ってもらいたい!!
- ・税について未熟であったが、地域経済のための落とし方であれば、透明性をもって使ってほしい。第一次、二次、三次産業による税収は多様であり、偶然にも「観光」「温泉」による企業、法人税を考えればよしではないか。
- ・日本有数の温泉地である別府の入湯税が低くて驚いた。宿泊税の議論もあるが、単純に単価を上げてよいのでは？議論が必要ですが市の発展のためには必要だと思う。
- ・数字やデータは各政策において重要な指針になるものであるが、それだけでは測れない実情というものがあることを知ることができた。
- ・大変興味のあるテーマでした。疑問点として「観光客数」は各自治体で統一した定義で測られた数字なのではないでしょうか？これが違うと比較はあまり意味がないのでは？
提案として、①入湯税を150円⇒250円に上げる(別府市)、②宿泊税を徴収する(別府市)、交通渋滞対策のインフラ整備に充当する(まちの環境を悪化させたことに対して応分の負担をしていただく。)
- ・市町村により課題はいろいろ。まちにとって何がいいのか、温泉の環境整備も含め、しっかりとしたデータをもとに温泉地のあり方を可視化し、向上してもらいたい。
- ・入湯税の現状、収支ウエイト、比較が分かり良い勉強になりました。観光を税収につなげる工夫の大事さを知りました。別府市も竹細工等を活かした土産物のブランド化+高額化にて観光客に対する入湯税以外の産業で得る税収アップが必要と感じています。
- ・入浴者に対して、入湯税の使われ方をもっと詳しく伝えるべきでは。観光客、住民、それぞれの思いがあるため、バランスを考えて正しく使うように。「税金」というと日本人は少し考えが固いというかしらがないと思いがち。使うほうがしっかりとした考え、正しく使うということを国民・住民に伝えることをしっかり心がけてほしい。
- ・観光予算＝観光客のためだと思っていたが、市長、町長さんからの話から観光予算も地元のためになっていることを知ったが、これは市民に発信すべき。
- ・入湯税の用途は、ゴミ・し尿・消防が主となっているのではないかと。箱根町の指摘のとおりであり、その対策を議論してほしかった。また、入湯税の廃止が一方で叫ばれている、維持の必要性を議論してほしかった。

(3) 外国人観光客に対する入浴環境について

【主な内容】

- ・タトゥーの問題はクリアされつつあると思った。
- ・タトゥーOKの表示、アイコンは画期的!!この別府モデルが全県に、全国に、世界に広がることを期待します。これは大きな「ONSENアカデミア」の成果のひとつである!!
- ・別府市モデルの取組みを別府市だけの取組みではなく、全国で統一した取組みにすべきだと思いました。
- ・インバウンドに対しての、タトゥーに関する方針を広域でまとめるとか、マナーについての再整備を進める等、必要だと思う。
- ・外国人観光客のタトゥーは、文化であるから受け入れるべきという意見が多かったが、入浴施設管理者の立場からは、区別ができず、確認することもできず、日本人等のファッション性も高く対応が難しい。国レベルで統一したものがほしいと思いました。

- ・別府の取組みが進んでいると感じた。タトゥーについては結論は出ないだろうが「受容」と「共生」とかが共通認識はあると感じた。どう周知していくかの問題であろう。
- ・外国人と日本人とは習慣も違うので難しい問題です。しかし日本に來ている観光客は日本式に取り組んでもらわなければならないと思います。温泉の利用方法を詳しく説明するように!! 外国人に対してはイメージが悪いと思っている人が多いと思います。
- ・世界の文化の理解と日本文化の現状、差異の調整に尽きる。タトゥーの理解はしにくいですが、徐々に相互で歩み寄れる環境づくりも「温泉入浴」の環境から可能になると思う。人と人のつきあいを裸同士でできる環境である。
- ・昨年出た意見が翌年形となって進んでいるので素晴らしいと思いました。本ツール (map) がしっかりと活用されることを願っております。
- ・タトゥーの件では統一的なもの (規定を) をつくるのは良いと思います。外国人の職員を採用しているのは良い方針だと思います。
- ・パネリストは行政関係者だけでなく、市民、業者等も含めたほうが良いのではないかと。
- ・パンフでの周知はよいと思う。HPに入浴方法の動画をあげてわかりやすくしては？
- ・日本が観光立国を目指すのであれば、多文化を認める必要あり。タトゥーは全面的に認めるべき! 地域住民への理解・教育は熱心に進める。
- ・タトゥーについては、多文化をお互い (観光客・市民) が学ぶべき。タトゥー=ヤクザという偏見もどうかと思う。
- ・観光客の外国人タトゥーを問題にしていたが、タトゥーが悪いとなると観光客が減るとの意見 (あわら市長)、日本国内にいる日本国籍を持っていない外国人 (在日) の人のタトゥーはどうか。日本国籍を持った人のタトゥーはどうか。魏志倭人伝の歴史からタトゥーは文化であり悪いとは言えないのではないかと。
- ・タトゥーを入れた人の入浴を認めるのかどうかについて見解を出してほしかった。
- ・(タトゥー) 文化が違うことで生じる問題。だからこそ伝える努力、知ってもらう努力が必要。もっと簡単にシンプルな表現に努めるほうが良いのではないかと。
- ・欧米人と中国・韓国人は、入浴に対するマナーが違うのか同じなのか難しい問題です。
- ・タトゥーをはじめ、文化の違いによる入浴方法の違いは考えないといけないと感じた。
- ・外国人とのコミュニケーションは中学生程度で十分通じて外国人に「私の言葉はわかりますか?」という「分かる」と。やはり要は「心」であると思う。
- ・タトゥーは、入浴できるように理解と工夫が必要です。可で良い。マナーについては旅行会社が集客する時点から映像等で理解していただきたい (出発前の教育)。
- ・タトゥーは海外ではコンビニ感覚でいれることができるほどメジャー。タトゥーのある人を入浴不可とすることは国際化とはベクトルを異にするこの理解を広めるべき。入浴マナーは全国共通、全国的に発信すべき。
- ・これまでもそれぞれの自治体 (温泉地) において議論されてきたことと思うが、今回の会議において、やはりどの温泉所在地も対応等苦慮していることが分かった。日本全体の問題として、国の統一した見解を示していただければと思う。
- ・市営温泉の多言語対応を早急に進めてほしい。誰もが快適に入浴できる環境整備を。

Q3 今後、ONSENアカデミアで取り上げてほしい議題、また、その他ご意見がありましたらご記入ください。

【主な内容】

- ・別府らしい情報発信の形を新しく作り出すことが必要。文化面が薄い。「温泉+文化」が大切。例えば「温泉文学大賞」を創設するとフィルムコミッション、ロケツーリズムにもつながる。日本初の試みである。500~3,000万円/年で可能である。
- ・入浴料についての議論をしてほしい。
- ・温泉街の空きホテル、廃ホテルの問題
- ・広域観光、観光圏に関するテーマを希望します。

- ・どの市町も財政難であり、永続的な財源確保は重点課題、新税の創設を含めた議論が聞きたい。
- ・再生可能エネルギーの取組み。
- ・今回の別府 ONSEN アカデミアは大変良かったと思います。日本人の医療関係者に温泉専門員が少ないので、今後は多くの専門員を育てるように医師会や厚生労働省に働きかけていただきたい。温泉は健康に良いのは間違いない。温泉専門員を全国から呼んで健康予防に大変良いことを発信してほしい。
- ・情報共有のことが度々表現されたが、共通部と個性の部をしっかりと考えてほしい。地域固有の温泉のつくり方、運営の仕方は異なるものでなければ特長がなくなる。別府には別府の歴史や文化、温泉そのものの特長、又、市民とのかかわり方は特長を生かして築いてほしい。別府の八湯は長年かけてできたもの、新しくする方法も十分に検討が欲しい。風景は地域独特の成果物であるが、創る意匠デザインが、景観、風景、風土となっていく過程である。
- ・観光地を支える人材育成（学校教育、現役の職員含む）
- ・東北、特に福島の温泉関連の方々も呼んでください。
- ・外国人の国別、入浴に対しての興味調査もしてほしい。
- ・各地の取組み（エビデンス）情報共有が大切だと思いました。
- ・会場内の聴衆者との意見交換の時間を設けてほしい。
- ・温泉地内（あるいは温泉地間）の移動、交通手段の整備状況や事例。（例）遊歩道、自転車道、コミュニティバス、Hop-on Hop-off（様々な観光地を乗り降り自由に楽しめるバス）、ルートマップと多言語化など。
分科会、温泉会議の内容を後日ネットで公開してください。
- ・温泉に備わっている「資源」について、多面的（文化的、自然、技術、その他）に議論する。
- ・インバウンド対応の全国的共通ガイドラインの作成が必要になると思う。第3回開催も期待しています。
- ・外国人の特に道案内を市民がスムーズに行えるような方法を考えて市民に伝えてほしいものです。
- ・（日本的なテーマ）①和菓子、②土産物、③お茶、飲み物
（スポーツ種別等の活用法）①ラグビー、②野球、③サッカー
（移動方法）①電動自転車、②飛鳥II等のクルーズ船、③JR、駅
（いやし）①照明、演出、②香り、③空気、換気
- ・世界の温泉と日本の温泉との違い、入浴の仕方、考え方等を日本人達にも伝えてほしいです。観光や旅行は平和であるからできること、自然は素晴らしいものだけれど、恐ろしいものでもある。温泉があるということは火山もあるということ。災害のことも考えるというのは少し違いますか？
- ・温泉は有限なもの。観光面だけでなく資源面での検討は行わないのか。

特別講演①

「子どもと女性のスポーツアカデミア」

1 講演

(1) 演題：「子どもは休むのもトレーニング」

講師：国立病院機構西別府病院スポーツ医学センター 副センター長 馬見塚 尚孝氏

講演概要

ジュニアアスリートの育成方法について、高身長・良き人材・障害なし・運動スキル・スポーツスキルの5つをキーワードに説明

○大谷翔平選手の特徴の一つである高身長選手を育成するためには、発達段階に応じたトレーニングが大切である。

○高身長アスリートを育成する睡眠方法として毎日同じ時間に入眠することや入眠の60～90分前に40～41℃の水温に10～15分程度入浴すること等が効果的である。

○子どもの時の障害は高校生や大人になった段階で支障をきたすことから、障害の予防が大切である。

(2) 演題：「成長期と思春期は食べることもトレーニング」

講師：国立病院機構西別府病院スポーツ医学センター センター長 松田 貴雄氏

講演概要

サッカー女子なでしこ JAPAN で活躍した選手の事例などを基に、医学的見地から成長期と思春期のトレーニングを説明



パネラー



パネルディスカッション



会場全体



会場客席

特別講演①

- 運動ができる人のことを運動神経がいいと言うが、医学用語での運動神経とは脳から出ていく神経全てを指し、特別にスポーツに関してのものではない。センス (SENCE) は感覚神経の方を指し、目で見て脳で感じて筋肉を動かす力。スポーツ選手のセンスがいいとは認知能力が高いことを示す。
- スキヤモンの成育曲線に見られるとおり神経型は早期に発達することから、小学生で身につけたセンスが生涯にわたって役立つ。
- 筋肉が増えるとエネルギーが必要となる。エネルギー利用度は体脂肪ではなく筋肉増加が大きく影響する。

(3) 演題：「女性の特性を活かしたトレーニング」

講師：日本体育大学児童スポーツ教育学部 教授 須永 美歌子氏

講演概要

- 女性の特性を活かしたトレーニングについて、女性アスリートに多い健康障害、月経周期とコンディション、月経周期を活かしたトレーニングの順に説明。
- 夏季オリンピックに参加する日本代表女子選手の数は年々増加しており、リオ五輪では男女比は51：49であった。そこで、女性への運動指導は男性と同じでよいのか？女性のからだは男性と比べてどう違うのか？などについて理解を深める必要がある。
 - 月経周期とは、月経1日目から次の月経開始日の前日の日数のことである。無月経は病気であるという認識が大切で、治療が必要な場合がある。
 - 月経が止まることは体調不良のサインである。月経周期を考慮したコンディション管理は必要不可欠である。女性のからだの特性を理解した指導が望ましい。

2 パネルディスカッション

テーマ「子どもと女性のスポーツアカデミア」

コーディネーター 大分大学教育学部 教授 谷口 勇一氏、パネリスト 上記講演1～3の講師

パネルディスカッション概要

- 谷口氏がコーディネーターとなり3名のパネリストがホワイトボードを使って考えなどを説明。
- スポーツ指導とは、プレイヤーを伸ばすことに他ならない。
 - プレイヤーにとって魅力的な指導者はどんな人なのか。それは研究心に溢れている人なのかかもしれない。自分たちのために指導者も勉強していると思えたとき、プレイヤーの指導者に対する信頼度が高まり、ひいてはパフォーマンスの向上が期待されるのではないだろうか。

特別講演②

「六郷満山開山1300年を迎えて」

1 講演

国東半島に点在する数多くの六郷満山の寺は、養老2年(718年)に仁聞菩薩が開基したと伝えられている。仁聞菩薩は宇佐八幡神の化身として、神仏習合の山岳宗教「六郷満山」を開いた。平成30年には六郷満山が開山して1300年の節目を迎え、これを記念して様々な取組を行っていきにあたり、本講演会を開催した。

(1) 演題：「六郷満山開山1300年に向けて取り組むこと」

講師：国東半島・宇佐地域・六郷満山開山1300年誘客キャンペーン実行委員会 近藤 教夫氏
講演概要

- 六郷満山は平成30年に開山から1300年を迎える。これを記念し様々な誘客・広報活動をしていくため、大分県、宇佐市、豊後高田市、姫島村、国東市、日出町の行政や観光協会、地域団体によってキャンペーンの実行委員会を結成し活動している。キャンペーンでは鬼サミットの開催や寺院のライトアップ、パンフレットの作成、太宰府市の九州国立博物館での六郷満山展等行っている。九州国立博物館では六郷満山展図録が完売し、増刷までするなど非常に好評を博した。
- 10世紀から11世紀にかけ隆盛を極めた宇佐神宮が国東半島の6つの郷に次々と寺院を開き、この寺院群を総称して六郷満山と呼び、奇祭や磨崖仏を始めとする独特の山岳仏教文化が開いた。六郷満山最大の特徴は神を祀る宇佐神宮が寺院を建立したことにある。これが神仏習合の始まりであり、これを機に八幡信仰が日本中に浸透していく。全国11万の神社のうち最も多いのが4万を超える八幡社で、宇佐神宮はその総本宮である。
- 江戸時代以前は弥勒寺の僧侶達が個人的に峯入りを行っていたが、江戸時代以降集団で行われるようになった。今回六郷満山開山1300年記念六郷満山峯入行(一般参加型)を実施する。前回の峯入りが平成22年に行われたので本来なら10年後の平成32年だが、今回は1300年キャンペーンに合わせ、平成30年の4月から6月に実施する。またツアーコースとしての販売も行い、好評であった場合は秋にも開催を予定している。
- その他にも寺院のライトアップや鬼にまつわるお寺を巡る鬼朱印というご朱印巡りのツアーも企画している。

(2) 演題：「国東仏教文化の楽しみ方」

講師：豊の国千年ロマン観光圏観光地域づくりマネージャー・宇佐市観光協会事務局長
小野 辰浩氏

講演概要

- 国東仏教文化の楽しみ方について観光面からお話したい。「神社を知る」「古代寺院を知る」ということは地域と日本人の歩みを知ること。歩みを観光素材にして地域間交流を図り地域活性に繋ぐというのが今の県北部の観光のスタイルである。
- 神宮は神社と何が違うか？神宮は皇室の祖先神、歴代の天皇、天皇の神器を神として祀る宮で、それぞれの時代の天皇から分け与えられる。全国で24宮が存在するが、日本で始めて天皇を神として分け与えられたのは宇佐神宮である。宇佐神宮と六郷満山は国家にとって偉大な功績を遺した場所である。
- 日本において仏教は、大陸文化に習い、日本人の学問を高めることによって国を豊かにするものとして国を挙げて寺院が建立された。仏教は本来神社のような自然崇拜の信仰はないが、密教のように火をよく使うことが六郷満山の特徴である。『六郷』とは「来縄」、「田染」、「伊美」、「武蔵」、「国東」、「安岐」の区域を指し、『満山』とは仏教的要素、仏教寺院の集合体を示す。六郷満山とは6つの地域で仏教がとて盛んであったことを表している。六郷満山開山1300年とは仁聞菩薩が六郷山の三山二八本寺を完成させてから1300年ということである。

特別講演②

- 1300年前に国東半島において古代仏教と自然崇拜の信仰が合体し、宇佐神宮と弥勒寺が誕生、国東半島に広がった。法相宗の学問を身につけ、大和朝廷と力を合わせ国造りを行った。仏教により文字が伝わり、寺院の伽藍を建築することにより家作りを学んだ。
- 六郷満山には様々な時代のお寺や遺跡が残っており、どの時代のものかをガイドさんなどから聞きながら楽しんでもらいたい。国東仏教には①古代仏教の時代、②天台仏教の時代、③国東仏教保持の時代があり、古代仏教の時代は538年あるいは552年に国東半島に仏教が伝わってから788年に最澄が比叡山に延暦寺を建立するまでを指し、天台仏教の時代はその後宇佐神宮大宮司の弟が天台座主となり、天台宗が六郷満山に入ってくるが、1582年に織田信長による比叡山焼き討ちまでが起こるまでの時代と考えている。その後国東半島にて宗派を問わず仏教寺院を集め、両子寺を中心の形となり、国東仏教保持の時代となる。
- 六郷満山によって宇佐・国東半島の暮らしは豊かになり、国家の基盤を造り上げることにより大繁栄を遂げた。そして宇佐神宮の大宮司の一族が天台座主となり国東仏教が天台宗に変わっていく。そして宇佐神宮の衰退に合わせ、各寺院が独立を始め、その後国東仏教を守るため、各寺院の集合体が出来上がっていった。

2 質疑応答

- Q. 1300年キャンペーンのプログラム類について1300年のイベントが終わっても年次でできるものがあるように感じられるが、それは念頭において活動しているのか？
- A. 1300年ということでスタートした会であるが、1400年に向けてどう残していくか地域のものとして重要である。30歳代の副住職がたくさんいるので協力して寺院ライトアップや文化財特別公開など継続できるよう活動していきたい。



近藤教夫氏講演



講演スライド



会場客席



六郷満山「瑠璃光寺」

作成中